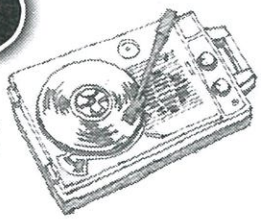
『週刊ポスト』2018.5.14(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦



第34回 マイナーからメジャーへの展開が成功した『恋のバカンス』

個人的な嗜好は別にして、初期の和製ポップスを代表する名曲として、おそらく最も多くの人から選ばれるであろう『恋のバカンス』は、ザ・ピーナッツの代表曲であるとともに、作詞家・岩谷時子、および作曲と編曲を担当した宮川泰の名を後世に残す曲となりました。

宮川によると、当初は3連12ビート（チャンチャカチャ、チャチャチャ、チャンチャカチャ、チャ）のリズムによるロッカバラードのようなものを想定して曲作りを始めたようで、前回ご紹介の『ふりむかないで』創作時に『ダイアナ』を参考にしたのに続き、再度ポール・アンカにあやかり『君は我が運命（You Are My Destiny）』から曲のイメージを湧かせます。しかし――。

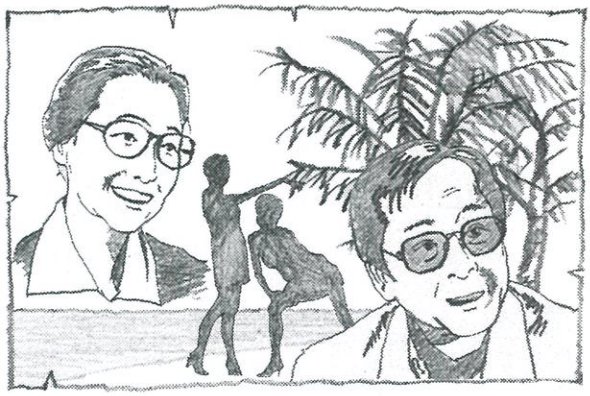
結局『恋のバカンス』は、スローバラードではなく、それまでピーナッツがカバーしてきたラテンの雰囲気を感じさせる4拍子のアレンジで完成形に至りますが、私たちの知っているあのリズムに変えるよう提案したのは、渡辺プロの社長、渡辺晋でした。

ジャズ・バンド「渡辺晋とシックス・ジョーズ」のベーシストでもあった渡辺のアドバイスはそれだけに留まらず、前半のマイナー調をサビ部分から明るいメジャー調に変えるよう、宮川に進言します。

マイナーコードからメジャーコードへの展開は、当時、飯田久彦や坂本九（高校の同級生同士ですね）がカバーしてヒットしていたデル・シャノンの『悲しき街角』や『花咲く街角』の影響が感じられるし、ベンチャーズやカウント・ベイシーが演奏していた『Walk, Don't Run』を耳にしていたのかもしれません。

作詞の岩谷が、前半のマイナー部分の歌詞を未来形にし、メジャーに変わる後半部から過去形で表現しているところからして、メロディー先行だったのかもしれません。

岩谷の才覚は、「ためいき、裸、人魚、秘めごと」といった当時としては扇情的に感じられるきわどい言葉を、収録時21歳だったピーナッツの二人に与えたところにも感じとれます。清純派というイメージを逸脱する大胆な歌詞を使い、そのギャップで印象付けを図るという手法は、その後、加山雄三、ピンキー、佐良直美、郷ひろみのヒット曲を生み出します。昭和38年4月発売の『恋のバカンス』は、この年の東レの広告テーマ「バカンスルック」との相乗効果で、その夏、6月から10月まで長期にわたりヒットを続けました。



『恋のバカンス』の翌々年、全編英語で歌われる『涙の太陽』（歌・エミー・ジャクソン）が和製洋盤として登場します。作曲と編曲を担当した中島安敏は、アレンジはベンチャーズから、サビからメジャーコードに転換する構成は『恋のバカンス』から触発されたものでしょう。

『涙の太陽』がGSや歌謡曲の洋楽化へと導く源流であったことを考えると、その源泉の一つである『恋のバカンス』の功績の大きさがわかります。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある